

世界一の二酸化炭素排出大国中国に今世界の目が集まっている。

30年以上も平均で10%近い経済成長を実現し膨張し続ける大国は近代史上例がないのではないだろうか。特に21世紀に入ってから連続して10%を超える高い経済成長を実現している。2008年秋に発生した世界同時不況・金融危機からいち早く脱却し、世界経済復活の牽引役になっている。

中国が小さな国ならば、さほど注意がはられないのであるが、巨龍とも呼ばれる大国、世界人口の約2割を占め、ヨーロッパ、アメリカ合衆国に匹敵する広大な国土を持った国の動向は否応なく世界中の国々を巻き込む。今、経済、環境などの問題は国境の存在と関係なく隣国と、世界とかわってきている。中国における政策選択の失敗は世界中に影響を与える。特に隣国であり、経済面でも環境面でも近い存在である日本に与える影響は計り知れない。政治関係の動向如何で熱いだけの、冷めただのと他人事のように言っている場合ではない。

「二衣帯水の二国関係、関わり合うのは歴史の必然」。

これは私が毎回中国に関して講演する際に必ず紹介する言葉である。二千年以上にもわたり経済文化など様々な面ですつと関係を持ってきた国との関わり合いはこれからますます続く。日本人が中国に対して傍観者でいることは許されない。そうであれば私たち日本人が中国と長くつきあっていく上で、相手のことをよい面も悪い面

も正しく知ることが大切である。

ところが、日本における中国に関する様々な報道や論評を見ていると確かに事実であるとは思われるが、断片的な特定の側面だけの紹介のものが多く見受けられる。決して公平といえる紹介の仕方ではない。私が専門とする環境分野でも環境汚染のひどさのみを強調する報道、環境対策の遅れを糾弾する報道ばかりが目立ち、実は苦勞しながら現場で一生懸命取り組んでいるのだという地道な部分が見えてこない。報道はエンターテインメントだから仕方がないという声もあるが、これでは日本国民が中国のことを正しく判断できなくなるおそれがある。

私もかつて赴任した早々は同じような目で中国を見ていた。環境汚染のひどい部分や対策の遅れとか、あるいは中国人に対してマナーが悪いとかすぐにごまかす、いい加減だとか悪い面ばかりに目を奪われていた。

それを友人に紹介して自らも楽しんでいたのだが、ある時、自分がとんでもない勘違いをしていることに気づいた。それは自分が「日本の常識」の上に立ってしかものを見てこなかったこと、正確な情報を取っていないかったために生じた誤解にもとづいたものだった。常識、すなわち固定観念から脱却すると、あるいは広く情報を集めて分析すれば全く別のものに見えてくる世界があることに気づきはじめた。

私は縁あって1997年からずっと日中環境協力、中国環境問題の研究に正面から取り組むことになった。これまで10年以上北京を拠点として活動し、年によっては年間100日以上中国のいろいろな地方を飛び回ってきた。先入観を消すため最初の頃は、「人が書いたものを読まずにまずは自分自身の目で現場を見、話を聞く。その第一印象を大切にすること」を心がけてきた。時が経つに連れて、中国のことを知れば知るほど環境問題に限らずあらゆる面で問題解決の困難さを認識するに至った。

国や地域が抱える様々な問題をどううまくバランスよく治めていくかという総合的な観点から考えると、環境

問題の解決はただそのための対症療法的な対策をすればすむ問題ではない。地域の社会経済や福祉、貧困、民族問題などがからんだ複雑なパズルを同時に解いていかなければならない問題でもあるからだ。

かつて私が視察した先に東北地方の遼寧省瀋陽市市街地に立地する瀋陽冶金工場があった。1920年代に操業を開始した国有企業であったが、生産効率の悪い旧式の設備で大量の汚染物質を排出していたため強制的に閉鎖されることになった。当時この工場からの二酸化硫黄年間排出量は6万トン（日本全国の工業系排出量の約10分の1に相当）で瀋陽市全体の排出量の半分程度を占めていた。閉鎖、すなわち、強制倒産させるにあたっては、地元省市の判断だけでは決定できず中央政府から副総理を招いて決定した。工場労働者3万人の失業、関連産業生活者も含めれば10万人以上の生活に影響を及ぼす大問題であったからだ。レイオフ、失業した人たちの再就職等生活の安定、退職者の年金支払いなどを考慮せずに環境対策のみの観点から閉鎖・倒産の決定をすれば地域社会は大混乱になるので総合的な判断が必要だった。2001年に閉鎖されたが、この工場が戦前日本によって建てられたものだということを耳にした時、深い関わり合いを意識せざるを得なかった。

本書の内容・構成について簡単に紹介しておきたい。

本書は全体を三部構成としている。

第一部は総論的内容で、ここを読めば中国の環境汚染の現状と最近の対策がだいたいわかるようにまとめた。対策ではこの5年間中国政府が最も力を入れている「省エネ・汚染物質排出削減（節能減排）政策」と、世界中から注目されている中国の地球温暖化問題への対応について最近の動きを中心にまとめた。

第二部は私の現地滞在レポートを中心にまとめた。その大部分は日本経済新聞社日経Ecolomyに連載したコラム「環境問題のデパート・中国の素顔」から再編集したものである。

第三部は日経B P社ECO JAPANに掲載された私のインタビュ記事「環境問題のデパート・中国、日本はどうかかわり合っていくべきか？」を転載させていただいた。

また、巻末には読者の便宜のために本書の内容と密接に関係する日中環境保護協力関係資料を収録しておいた。本書のタイトルにも使われている「環境問題のデパート中国」というフレーズは10年ほど前から私が好んで使っている言葉で、本書の中でも何回も登場する。中国は従来型の公害問題（大気汚染、水質汚濁、土壌汚染など）のみならず、新しいタイプの環境問題（ダイオキシン、環境ホルモン等化学物質問題など）、砂漠化問題、生態環境保護問題、さらには地球温暖化問題などを抱えており、かつ、それぞれの問題のスケールが大きい。品揃えが豊富で規模が大きいところがデパートそっくりなので好んでこの表現を使っているもので、決して中国のことを揶揄した表現ではないことをはじめにお断りしておきたい。そして本書全体を通して私が読者にお伝えしたいのは、中国の現場でどのような問題が存在し、それを中国自身がどのように解決しようとしているかという現実である。さらにはそこに日本がどのようにかわり合っていくべきかという視点を込めた。

本書は環境問題を中心に扱ったが、日中相互理解の促進に少しでも役立つことができれば本望である。

2010年3月

小柳 秀明